

色彩嗜好と意識的性格との関係性

2019M30003 件 真真

要旨

日常生活の中で、いくつかの質問への回答によって、回答者の性格を判断するという心理テストをよく目にする。このようなテストの中には色の好みの質問も含まれている。たとえば、赤を好む人は外向的で、明るく活動的である（宮崎，2000）。実際に色彩嗜好と性格との間に関係性があるか否かについての研究も近年増えている。そのうち、色彩嗜好と無意識的性格との間に関係があると明らかになったが、色彩嗜好と意識的性格との間に結果が一貫していない。そのため、このあいまいさについて検討する意義があると考えられる。そこで、色彩嗜好と意識的性格との関係性について、類似性や自己維持動機による現実自己、特に自尊動機による理想的自己が、色彩嗜好に影響を与えるということに検討した。

本研究で、先行研究の結果の不一致性について、3つの側面から考えた。まずは、色彩そのものへのイメージの問題である。色の連想性と象徴性に注目すると、色彩嗜好と性格との関係を検討する際に、色へのイメージを仲介として考えることが重要であるということが明らかとなった。次に、色彩が付随する対象物への嗜好についての問題である。Norman & Scott (1952) は、色彩と対象となる事物の結びつきを考えなければ、一般的な色の好みの調査結果を必然的に不安定なものにする指摘している。つまり、色彩が付随する対象物への嗜好の影響が混入しないということが重要である。最後に、主体の嗜好のメカニズムの問題である。過去の経験や学習による快・不快な感情を喚起することは色彩嗜好に影響を及ぼす可能性がある。そして、自分と類似し、親近性が

ある対象には好意を持つことが知られている。また、松田ら（2019）の調査では、人は自分のパーソナリティと似たようなイメージの色を好む傾向があることも示唆される。つまり、自己イメージと色イメージとの類似を媒介とした色彩嗜好の機制について検討する必要がある。そのため、本研究では、この3つの側面を考えて色彩嗜好と意識的性格との関連、特に色彩嗜好と理想自己との関係性を検討することを目的とした。仮説としては、自尊動機による理想自己が色彩嗜好に影響を与えると考えられる。

本研究では、日本人28名と日本語専攻の中国人32名、合計60名を対象としてアンケート調査を行った。調査項目は、色の好みがあるか否かについての質問、色の好みの自由選択、SD法における好きな色や嫌いな色へのイメージの測定、自己イメージの測定、年齢、性別などから構成されていた。

色の好みの自由選択について、12色から好きな色と嫌いな色を一つずつ選ぶように回答を求めた。その結果、ピンクと青を好きな色、茶色とグレーを嫌いな色として選んだ対象が多かった。

そして、好きな色や嫌いな色へのイメージを把握するため、10人以上回答したピンクと青、茶色とグレーを用いて、色へのイメージを比較した。その結果、好きな色としてのピンクと青のイメージではほとんど有意差が認められたが、嫌いな色としての茶色とグレーのイメージでは、「軽い」に関してのみ有意差がみられた。

次に、自己イメージ（現実自己と理想自己）の測定について、現実自己イメージと理想自己イメージとの関連を検討したところ、「派手な」「男性的な」「軽い」の以外、いずれにも有意な差がみられた。そして、好きな色へのイメージは、理想自己と現実自己のいずれにも関係がある。

また、好きな色へのイメージと理想自己イメージとの正の相関は、自尊動機から好きな色を選んでいるという仮説を支持すると考えられる。嫌いな色へのイメージと現実自己イメージとの関連では、ほとんどの項目で有意な相関が認められなかったが、1つだけの項目では負の相関の傾向がみられた。嫌いな色へのイメージと理想自己イメージとの関連では、「暖かい」「情熱的な」「動的な」「軽い」との間に負の相関が認められた。この結果により、嫌いな色と自己イメージとの間に類似性や自尊動機からの影響は小さかったが、関与していると思われる。

最後に、好きな色へのイメージと現実自己イメージの差と、好きな色へのイメージと理想自己イメージの差を比較したところ、この間に有意ではなかったものの、好きな色へのイメージと現実自己イメージの差よりも、好きな色へのイメージと理想自己イメージの差のほうが小さいという傾向があったことが明らかとなった。つまり、類似性や自己維持動機より自尊動機のほうが好きな色を選ぶ際に与える影響が大きいと推察される。

嫌いな色へのイメージと現実自己イメージと、嫌いな色へのイメージと理想自己イメージとの間に有意差がみられた。また、嫌いな色へのイメージと理想自己イメージの差よりも、嫌いな色へのイメージと現実自己イメージの差のほうが小さかったということが明らかとなった。つまり、自尊動機より類似性や自己維持動機のほうが嫌いな色を選ぶ際に与える影響が大きいと推察される。

すなわち、好きな色は理想自己に似た傾向があり、嫌いな色は現実自己に似ているということが明らかとなった。また、予想通りに自尊動機による理想自己が好きな色に影響を与えるということが明らかとなった。

本研究では、新しい視点から色彩嗜好と性格との関係性を検討した。結果は先行研究と同じところがあるが、異なるところも得られたので、一定の意義があるであろう。しかし、本研究で分析対象の人数や国籍、測定項目と時間帯などの点について考えが不十分だったので、今後はこちらの点を考えるうえで、深く検討する必要がある。